
往往来々

鴝

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

往々来々

【Nコード】

N0135P

【作者名】

鶉

【あらすじ】

弟を裏切ってしまった可哀想な兄の話です

わたしには兄がひとり居る様です。

そう人伝に聞きました。

しかしわたしは兄にまだ一度も会った事ありません。

というのはわたしの兄は本邸でなく離れでひっそりと暮らしているのです。

兄はわたしよりも数分先に産まれて来たのですが全く産声を上げなかったと聞きました。

どうも、母の胎内に居る時に何か悪い病気に掛ってしまった様なのです。

わたしと違って色素の薄い髪と眼をしていると聞きました。

可哀想に兄は禍の兆しだと言われ、屋敷には入れて貰えずに赤ん坊の頃から乳母と共に小さな離れで暮らしていました。

兄はその産まれ持った身体の為に跡取りになる事を許されず、幼くして隠居させられてしまったのです。

わたしは「お前があれの代わりに跡取りになるのだよ。」と言われて育てられてきました。

その為に幼い頃から沢山の習い事をさせられて忙しくしていたのですが、暇が出来ればあれば離れの方を見てまだ会ったことのない兄の事を考えました。

使用人の話によるとわたしの兄は金色の髪に赤色の眼をしているとのことでした。

わたしは髪も眼も真っ黒でしたから、なんて素敵な容姿をしているのだらうと思いました。

偶に使用人が出入りして世話をしている様でした。

使用人達は離れに入る際には必ずお面を掛けます。

兄の邪気の中てられない様にする為だと言うのですがどうして兄が邪気など持っていましたようか。

彼はわたしの半身で只の人間だと言うのに。

兄が不憫でなりません。

何度か離れに侵入しようと試みたのですが如何せん、回りには高い塀が有って出入り出来ない様になっているのです。

成長して行くにつれ、わたしは半身である兄の姿を思い浮かべては懐かしく思いました。

兄はわたし達がまだ胎内に居た頃、病を全てひとりで背負って産まれて来てしてしまったのです。

平等に背負っていれば良かった、或はわたしのほうが先に産まれていたのならと時折胸を痛めました。

これらの話は全て使用人達の噂話から知った事でわたしの両親は兄の事を一切口にしませんでした。

きつとこのままわたしに何も知らせないままにいようと考えているのでしょうか。

十になった朝にわたしは決心しました。

兄に会いに行こうそして今日わたしと同じ様に十になった兄におめでとうを言いに行こうと。

わたしは街に出掛けて鼻屑にしている文具店へ行きました。

そこで綺麗な赤色をした石製の文鎮を買いました。

そこでわたしは暗くなるのを待ち、その石の文鎮を持ったまま離れに向かいました。

しかし離れの外にはお面を付けた使用人が松明を持って夜通し見張りをしています。

そこでわたしは困ってしまい文鎮を持ったまま張り巡らされた垣根の周りをぐるぐると回りました。

丁度裏側に回った時、建物の中からうつすらと灯りが漏れているのに気が付きました。

あそこに兄が居るのだ！とわたしの胸は高まりました。

どうにかしてわたしが此処に居る事を知らせる方法は無いかと考えて、わたしは咄嗟に持っていた文鎮を垣根の内側へと投げ入れてしまったのです。

赤い石は放物線を描いて垣根の内側に消えて行きました。

やがて石が離れの庭の芝に落ちる音がして雨戸を開けるがしました。

兄が石に気が付いて庭へ降りたのだとわかりました。

表で番をしている使用人には聞こえない様に垣根に身体を這わせてコン、と小さく壁を叩きました。

すると内側からもコン、と小さく返事が聞こえて来たのです。

わたしは危うく声を上げそうになりました。

顔の知らない兄が壁一枚隔てた向こう側に居るのです、漸く会えたのだとわたしは静かにぼろぼろと涙を流しました。

しかし声を出せば聞こえてしまいます、わたし達は只もどかしくそこに立っている他はありませんでした。

そのときわたしはふと気が付いて着物の袖口から懐紙を取り出し、筆を執ってそれに「お誕生日おめでとございます」と書きつけました。

真つ暗だった事もあって蚯蚓の這った後の様になってしまいました。たがどうか伝わってくれとその懐紙を道に落ちていた石に括り付け、垣根の内側へ投げ入れました。

しばらくすると塀の内側から同じ様にして懐紙を結んだ石が返ってきました。

地面に落ちたそれを急いで拾って懐紙を広げてみると奇麗な字で「きょうでななつになったのかおまえはおとうとか」と書いてありました。

最低限の読み書きしか教わっていないのでしよう、兄は漢字を書けないらしく平仮名でそう書いてありました。

しかしわたしの送った手紙文を読む事が出来たのですから漢字を

読む事は出来るのでしょうか。

そこでわたしはまた「はい僕はあなたの弟です」と懐紙に書いてそれを投げました。

そうこうしているうちに空が明るくなってきました。

此処に居たら使用人に見つかってしまいうでしよう。

わたしは兄に「また明日来ますから」と書き付けて静かに屋敷へと戻りました。

わたしは夜になるまでに兄に宛てた長い手紙を書いて行く事になりました。

その日は習い事を早めに済ますと筆を執って机に向かいました。

拝啓

兄様、わたしは兄様の顔を全く存じ上げない上に兄様のお声も聞いた事が無いのですが、とても懐かしい気持ちでいっぱいです。

兄様はきつと心の何処かでわたしの事を憎まれているのだらうと恐れていました。

わたしが後に産まれてきてしまった所為で兄様はご不幸を背負われてしまったのですから。

兄様どうかわたしをお許し下さい。

わたしはこんなにも自分の身上を憎いと思った事は御座いません。兄様は大層綺麗な髪と眼をされていると聞きました。

眼のお色は赤だと聞いたので同色の文鎮をお上げしたく鼻簣にしている文房具店へ行って参りました。

いつか兄様もお連れしたいです、きつと行きましょう。

敬具

わたしは晩になるのを待つて書いた手紙を石に括り付けて垣根の内側に投げ入れました。

その次の晩、兄から返事が来ました。

■ ■、てがみをありがとう。

とてもうれしいわたしはおまえのことをにくいなんておもったことではないよ。

ぼくのかみはうすいきんいろでめのいろはあかだよ。ちょうどおまえのくれたいしとおなじいろさ。

そうだおまえにかみをあげる。

そうすればあえなくてもぼくのかみのいろはこんないろだってわかるでしょう。

■ ■はくろいかみをしているときいたよ。

ぼくはくろのぼうがすきだな。

つぎてがみをよこすときはとうさまとかあさまのことをおしえて

くれないか。

げんきにしているかしりたいのだ。

じゃあね、
■ ■。

懐紙には一房の綺麗な金色の髪が包まれていました。

わたしたちはこうして晩なるのを待つて手紙を交換しました。

拝啓

今朝は大分冷え込みましたが身体にお障り無いですか。

兄様がわたしの事をお嫌いだ等と申し上げてごめんなさい。

兄様はとてもお優しいのですね、ありがとうございます。

頂いた髪の毛は大切に纏めてお守り袋に入れました、とても見事な金色です。ねまるで真砂の様だと思いました。

わたしの髪はつまらない黒ですので羨ましいです。

さて兄様、此処で少し父様と母様の事を書いておきますね。

わたし達の父様は現在、異国の地にいます。

そこで毎日お国の為に働いているのです。

母様は大層お綺麗な方ですが、毎日わたしを抱きしめてごめんね
ごめんねと泣かれたりするのです。

きつとわたしを兄様と勘違いされているのでしょね。

でも兄様どうか心配なさいね、わたしはきつと父
様がお帰りになるまでこの家をお守り致します。

そして兄様をきつとそこから出してあげますからね。

きつと今回の戦争の為に皆考える事がおかしくなっているの
でしょう。

だから兄様をこの様に扱うのだと思います。

そうそう、今朝は使用人がひとり辞めて行きました。

どうも弟が出兵するので代わりに故郷の母の面倒を見ないとい
けないとのことでした。

あの異国の地で繰り広げられている戦いの為にここ数日わたしの
身辺は目まぐるしく変化しております。

ほつと一息つけるのは兄様とこうして手紙を遣り取りするとき
だけです。

わたしは兄様が大好きです。

敬具

■ ■ ありがとうばくもきつと ■ ■ がすきだよ。 あったことはない
がすきだ。 ありがとう。

とうさまとかあさまのことがわかってあんしんしたよ。

とうさまがはやくかえつてくるといいね。

ぼくはずっとここにいてからそとのようにうすがつたかわからないよ。

うちはどれくらいのひろさなの。

しようにんはなんにんくらゐるの。

■ ■ はいつもなにをたべているの。

ぼくはあさとばんにかぼちゃとさつまいもをふたずつきれたべるだけです。

いちにちじゅうへやのなかにいるからすることもなくてね。はらもへらないのさ。

■ ■ とてがみのやりとりをしているときがいちばんたのしい。じゃあね。

拝啓

兄様。

今回はわたしの一日に付いて書きますね。

わたしはまず朝起きたら皆に挨拶をして学校へ行きます。

学校とは机に向かって勉強をしたり講堂に集まって先生のお話を聴いたりする場所です。

しかし最近では専ら銃の使い方についての訓練を受けています。まるで兵隊さんの様です。

わたしはこの銃というものが嫌いです。

あれは恐ろしく大きな音がする上にとてつもないものです。人を殺す為の道具だと教わりました。

学校で一番楽しいのは食事のときです。

わたしも南瓜と薩摩芋を頂いております。

しかしそれでは腹が持たないので母様が持たせてくれる豆を皆と食べています。

昔の様に白い米が食べたいと思う事もあるのですが贅沢は敵だ！と毎日の様に言って聞かされておりますので我慢しています。

ねえ兄様大きくなったら二人して畑をやりませんか。

そこで米を沢山育てて腹がはち切れんばかりに米を食べてみたいものです。

学校から帰るとわたしは習い事へ出掛けます。

毎日違うものを習っているのですが一番好きなのはやはり書道の稽古でしょうか。

お師匠様がとても楽しい方なのです。

偶にこっそりと金平糖なるものを下さいます。

金平糖というのは海外の菓子で綺麗な色をしていて砂糖の様に甘いものです。

そうだ、少し紙に包んでおきますね。

さて、稽古が終わると家に帰って夕食を済ませて眠ります。

しかし母様と二人きりの夕食はとても静かで寂しいです。

わたしはいつも食卓を囲む時、父様と兄様の姿を思い浮かべます。そうすると寂しかった食卓がとても賑わうのです。

ねえ兄様一度位そうして食事をするのも悪くないですよ。

そうだ、忘れるところでした。

家の広さは兄様のいらっしゃる離れの建物の五倍程の大きさです。それから使用人の数は段々減って今ではもう三人程しか居りません。

そんな具合です。

それでは失礼します。

敬具

おかしとてもおいしかった。どうもありがとう。

あんなにあまいものをたべたのはうまれてはじめてだったよ。

おいしかった。

あと■■がいつもどのようなにしてくれているのかわかってとてもかんしんしたよ。

■■はえらいね、ぼくはまいにちなにもすることがないからただ、ねておきてめしをたべることのくりかえしさ。

まいにちおなじことをしているとね、そのうちだんだんいきているのかしんでいるのかすらふたしかになってくる。

でもこうしてまいにちちがうぶんをかくことで、ぼくなりちがうまいにちをおくっているのだとおもってとてもうれしくなるのさ。

ありがとうね■■。

しょくじをするときはとてもさびしいよ、ひとりだからね。

でもいつかかぞくよにんでしょくたくをかこむことのできるひがきたらいいね。

かぞくでしょくたくをかこむことはどんなにたのしいだろうね。またね。

拝啓

兄様。

今日とても悲しい事が有りました。
どうか聞いて下さい。

わたしに金平糖を下さった書道の先生が大逆罪の疑いを掛けられて警察に連れて行かれてしまったのです。

先生は趣味で舶来品をお集めになっていらつしたのですが、その事が幕府の役人に知れてしまい敵国の品を所持している等、言語道断だと捕まってしまったのです。

贅沢や娯楽が規制される様になってからは以前の様に遊園地や劇場へ足を運ぶ事も無くなりました。

段々と日常が灰色に染まってゆく様です。

兄様にも聞こえるでしょう。耳鳴りの様なサイレンの音が。

あれが街に響き渡る様になってから、夜な夜な夢を見る様になりました。

真っ赤な眼と金色の毛をした奇麗な犬がわたしの身体を頭の前から足の先まで切り裂いて行く夢です。

わたしの外皮はみるみるうちに剥けてしまい中からわたしでは無い誰かが出て来るのです。

わたしは所詮その人の外皮でしかなかったのだと恐ろしくなつて、そこで眼が醒めました。

まるでわたしはわたしの為に在るのではなく誰かの為に在るかの様でした。

夢の中で一枚の外皮と化してしまったわたしの身体性はとても薄く今にも風に飛ばされてしまいそうでした。

わたしは本当に飛ばされてしまうのでしょうか。

毎日毎日空に行く飛行機の落として行く黒い爆弾に当たってしまったえ、わたしは一瞬で飛ばされてしまうでしょう。

兄様わたしはとても怖いです。

敬具

それはこわいゆめをみたね。

よるねむれなくなったらゆずゆをのむといいとなにかのほんにかいてあったからそれをのむといいよ。

かあさまにいつてつくってもらうといい。

うちのにわにはゆずがみのっているだろう、たまにいいにおいがするからわかるのさ。

ここからもそらをゆく、てき■■のひこうきがみえるよ。

あれはこわいねばくもすきじゃない。

拝啓

兄様今日はお別れを言いに来ました。

わたしのところにも遂に赤紙が届いたのです。

わたしは父様のいる遠いところへ行かなくてはならなくなりました。

母様の事が心配でなりません、しかしわたしにはこの家をお守りする義務があります。

ですから戦地に赴いても必ずや帰って来る心算で行きます。

兄様とは暫くの間、手紙のやり取りが出来なくなってしまうです。とても寂しいです。

でも、わたしの帰って来る頃にはきつと戦争が終っていることでしょう。

その時は皆が揃って幸せに成れる気がするのです。

兄様の事を悪く言う者も無くなるでしょうからきつと兄様は離れから出る事が出来ます。

その時は家族揃って食卓を囲みたいものですね。

それから庭に小さな畑を拵えて米を育てたいものですね。

それでは暫しの間、失礼致します。

兄様どうかお元気で。

敬具

「兄様どうかお元気で。」

あの子は確かに垣根の外で首から下げたお守り袋を握り笑ったのだ。

あああああああああ、ご、ごめんねごめんねごめんねごめんね！

あああああああああああああああ！

ご免ね不幸を背負わせてしまったのはわたしの方だよごめんねごめんね！

あああああああああああ！

お願いだ！お願いだから無事で居て無事で帰って来てまた隣に戻って来て！

わたしはきつとお前が戻って来るまで此处で待っているから早く

帰って来て！

なあ馬鹿げている！馬鹿げているよ！こんな戦い、何の意味がある！

わたしは漢字の読み書きが出来る。

わたしは欠陥品だと虐げられたのではない。

わたしは長男として家督を継ぐ者として生き残る為に此处へ連れて来られた。

産まれた日からわたしは此处で暮らしており、役所にも名前を届けられて居ない。

わたし達は胎内に居た頃から、どちらか一方先に産まれた方が家督を継ぐ為に生き永らえさせられる事が決まっていた。

わたしは出兵を免れる為に気配を消してずっと此处で暮らす様に言われたのだ。

弟の存在は知っていたが勿論会わせてなど貰えなかった。

それにわたしは、弟が周囲の人間から兄が禍の兆しであるが為、離れに幽閉されているのだと聞かされているのを知っていた。

誰も本当の事を弟に言わなかった。

だから弟は最後までわたしを憐れんで戦争に行ってしまった。

弟は産まれたときからわたしの代わりに戦争に行く事が決められていた。

それなのに何も知らないあの子は、わたしに会いに来て手紙をくれた。

どうしてわたしは本当の事を言わなかったのだろう。

どうして漢字の書けない振りをしたのだろう。

どうしてあの子よりも先に産まれてきてしまったのだろう。

あの子はわたし達の出生の秘密を知っても尚わたしを好きでいてくれただろうか。

わたしは静まり返った離れでひとり戦争が終わるのを耐え忍ぶ。

あれが終われば総て、何もかもが片付く気がした。

いや、わたしの罪は絶対に片付かない。

あの子を裏切ってしまった事に対する償いはもう出来ない。

わたしはあの子のくれた赤い色をした文鎮を握り締めた。

その石は温かい色をしているのに屍の様に冷たく、わたしはぞつとした。

可愛い可愛いわたしの弟。わたしはその声も顔も知らないきつと一生知らないままだ。

成す術も無く愚かに地に伏して慟哭するわたしの頭上を異国の飛行機が轟音と共に空を切り裂いて行く。

(20100812)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0135p/>

往往来々

2010年11月19日21時55分発行